

エアドロップの今後

2025年3月



目次

01 / 要点	2
02 / はじめに	2
2.1 2種類のエアドロップ	3
03 / エアドロップに関する現在の課題	4
3.1 過去の失敗から学ぶ	5
04 / エアドロップの改善方法	7
4.1 エアドロップに対する真摯な取り組みと透明性の向上	7
4.2 コミュニティの参加推進	8
4.3 モニタリングの改善	8
05 / まとめ	9
06 / 参考資料	10
07 / 最新のBinance Researchレポート	11
Binance Researchについて	12
リソース	13

01 / 要点

- エアドロップは、トークン配布において最も普及した手段の1つとなりました。一方で、現状のエアドロップには一定の課題が伴っています。エアドロップが可用な業界慣行であり続けるためには、過去の失敗から学ぶとともに過去の成功を昇華することにより、そのプロセスを継続的に改善していく必要があります。
- エアドロップは、(1) 遡及的エアドロップと (2) エンゲージメントエアドロップに分類されます。
 - 遡及的エアドロップでは、ユーザーの過去の行動や活動に基づき、ユーザーに対して事前通知を行わずにトークンを割り当て・配布します。ユーザーに対して遡及的な報酬を付与することを主な目的としています。
 - エンゲージメントエアドロップは、今後のトークン配布の資格対象となるための行動を周知して行われます。新たなユーザーとアクティビティをプロダクトに誘致することを主な目的としています。
- プロジェクトは、プロダクトやコミュニティ開発の段階に応じ、最適なエアドロップの種類を検討する必要があります。
- 上記の2種類のエアドロップは透明性、コミュニティにおけるコミュニケーションと参加、公平性などの原則で共通しているものの、その適用方法が異なる場合があります。
- エアドロップがプロジェクトとユーザーの両方にとって生産的な活動である限り、同業界は、エアドロッププロセスを改善する技術（オンチェーンモニタリングやプルーフ・オブ・ヒューマニティ・ツールなど）に継続的に投資するモチベーションを維持し続けるべきであると言えます。こうしたツールが広く普及・利用可能となるにつれ、望まれないエアドロップファームिंग行為（獲得だけを目的とした行動）がゼロに近づくことが見込まれます。
- トークンは最先端の資産であり、エアドロップはさらに新しい資産配布の形式となっています。エアドロップの理想的な慣行と割り当てを集合的に決定するのは市場であるため、そのプロセスは非効率性が発生する可能性があります。このため、ユーザーとプロジェクトチームの両方がエアドロップに対し継続的に注意を払うことが推奨されます。トークン配布の将来的な方法を形作るのは現時点における行動のそれぞれであることを念頭に置く必要があります。

02 / はじめに

エアドロップは、暗号資産分野でユーザーを獲得しコミュニティを構築するにあたって広く用いられる戦略へと進化を遂げました。初期の注目すべきエアドロップは、アイスランドが発行した暗号資産を国民に周知させる目的で行われた2014年のAuroracoinです。Auroracoin公式ウェブサイト上で永住者IDを入力するだけで、トークンを受け取れました。

直近の2024年11月に実施されたHyperliquidのHYPEエアドロップは、おそらく近年で最大級であると同時に、最大評価を獲得したエアドロップの1つに数えられます。これにより、強力なエンゲージメントツールとしてのエアドロップの役割がさらに盤石化しました。ピーク時におけるHYPEの評価額はUniswapを抜いて100億米ドル超となり、ピーク価格で過去最大のエアドロップとなりました。

暗号資産プロジェクトにおいてエアドロップが広く用いられるようになると、エアドロップはオンチェーンの「金融メタゲーム」の1つにみなされるようになりました。これにより、エアドロップファーマーはボットを使用して可能な限りエアドロップを獲得し、トークンを早期に売却して利益を確定することが多くなっています（「シビルファーマーミング」としても知られる）。各プロジェクトではシビルファーマーミングの増加に対処するため、エアドロップの対象となるための要件の複雑性を高めています。旧来のエアドロップとは異なり、現在のエアドロップでは、ユーザーに複数のタスク（テストネットの使用、ソーシャルメディアへの投稿、ガバナンスへの参加、モバイルアプリケーションのダウンロード、チェーン間の資金のブリッジなど）の完了を求めるケースが多くなっています。求められる行動の多くは、オンチェーンにおける収益 / アクティビティの増加、またはソーシャルメディアでの存在感の向上など、各プロジェクトに直接的なメリットをもたらすものとなっています。

本レポートでは、エアドロップの効果的および非効果的な実践事例を解説した上で、エアドロップをトークンの配布とコミュニティ構築手段として捉え、コミュニティの信頼を高めるために実装可能なソリューションを提案します。

2.1 2種類のエアドロップ

1. 遡及的エアドロップ

Auroracoin、Uniswap、StarkNetなどの旧来のエアドロップは、エアドロップの割り当てに関する情報を事前公開せずに実施されました。これらのエアドロップでは、既存のコミュニティに報酬を付与し、ロイヤリティを高めることを目的としていました。

こうしたエアドロップは、「遡及的エアドロップ」と呼ばれます。

遡及的エアドロップは、よりユーザー重視型である傾向があります。過去を振り返ると今後も同様となる可能性が高いため、すでに確固たるユーザー基盤と市場シェアを獲得しているプロトコルにとって、同エアドロップの実施が最適であると言えます。こうしたプロトコルでは、初期のユーザー基盤を構築するためのエアドロップ（エンゲージメントエアドロップ）からはメリットが得られないためです。

2. エンゲージメントエアドロップ

最近実施された多くのエアドロップでは、今後開催予定または開催の可能性があるトークン生成イベント（TGE）をユーザーに事前に通知しています。こうしたエアドロップは、ポイントプログラムを使用し、有益なユーザー活

動を推進することを目的としたものとなっています。Redstone、Kaito、Hyperliquidは、最近実施されたこの種類のエアドロップの一例となります。

現在の業界慣習を踏まえると、この種類のエアドロップにとって最適な呼称は「エンゲージメントエアドロップ」となります。

エンゲージメントエアドロップは通常、プロジェクト重視型であり、初期の市場シェアの獲得を狙うプロジェクトが用います。同エアドロップは、新規ユーザーを集客するとともに競争力を維持する戦略であり、トークンインセンティブスキームを備えた同様のプロトコルと併用されるケースもあります。

図1: プロジェクトの開発段階に応じて最適なエアドロップの形式も異なる

	遡及的エアドロップ	エンゲージメントエアドロップ
説明	エアドロップの要件をユーザーに通知せずにトークン配布を実施。 例: Uniswap、StarkNet	ユーザーがエアドロップの要件を理解した後にトークン配布を実施。特定の行動を奨励する目的で、プロジェクトがポイントプログラムを実装する傾向がある。 例: Hyperliquid、Kaito
主な目的	既存のユーザーに対して遡及的に報酬を付与し、コミュニティのロイヤリティを高めること。	新規ユーザーを集客して有益な行動を奨励し、コミュニティを構築すること。
最適なプロジェクト	基盤が確立した大規模プロジェクト。	市場シェアと顧客基盤を拡大したい小規模プロジェクト。
プロジェクトに関する具体的な考慮事項	エアドロップ基準の決定にあたり、顧客基盤を十分に理解する必要がある。 エアドロップトークンの割り当てを誤った場合、既存の有意なユーザーが離脱する可能性がある。	エアドロップ基準の決定にあたり、高い透明性を確保する必要がある。 エアドロップ基準と割り当てを公開したら、以降の変更は避ける。

出典: Binance Research

03 / エアドロップに関する現在の課題

この1年間で、数多くのエアドロップが実施され、その中には、コミュニティから高い評価を獲得したものもあります。本レポートでは、トークンの当初の配布方法とは異なる各要因から影響を受け得るエアドロップトークンの価格パフォーマンスに関し、特にTGEの数か月後または数週間後に注目した議論は対象外とします。

最近のエアドロップの動向を把握するため、XのGrok AIを使用し、過去1年間に行われた注目すべき数件のエアドロップに関し、簡単なセンチメント分析を実施しました。

センチメントスコアの算出にあたり、**Grok**を使用して**X**の投稿におけるコミュニティのフィードバックを分析し、肯定的なコメントと否定的なコメント、エンゲージメントレベル、具体的な苦情や良いコメントを重視しました。また、

同じく公式発表、トークノミクス、および資格基準に関するウェブ記事のレビューも実施しました。センチメントは反応の優位性に基づき、ポジティブ、ネガティブ、混合型に分類されます。

図2: 透明性・一貫性の高い割り当てルール、シンプルな資格要件、エアドロップに関する過度のファームिंग行為の防止は、コミュニティにおけるエアドロップに対する前向きなセンチメントにつながる

プロジェクト	エアドロップの日程	スコア	センチメントに関する主な観察内容
Pudgy Penguins	2024年12月17日	10	極めてポジティブであり、コミュニティの期待は概ね満たされた。トークン供給量の大部分は、Pudgy Penguins NFT保有者に割り当てられた。
Hyperliquid	2024年11月29日	9	極めてポジティブであり、プロトコルへの初期参加者は巨額の報酬を獲得した。
Berachain(ベラチェーン)	2025年2月6日	8	ポジティブであり、コミュニティによる力強い支援を受けた。トークン供給量の大部分は、同エコシステムのNFT保有者に割り当てられた。
ZKsync	2024年3月24日	8	ポジティブであり、高い期待とエンゲージメントを獲得した。 <u>ネットワーク混雑</u> により、エアドロップ請求に遅延が生じたとされている。
Grass	2024年10月28日	8	ポジティブではあるものの、過度のファームिंगに関する <u>部分的な懸念</u> が生じた。
Eigenlayer	2024年5月10日	7	ポジティブではあるものの、 https://unchainedcrypto.com/5-reasons-e-beggars-are-not-happy-with-eigenlayers-airdrop/ - ~:text=Linear%20Airdrop%20Favors%20Whales&text=However%2C%20some%20are%20displeased%20with,special%20treatment%20for%20early%20adopters. 比例型配布モデル(初期参加者よりも大口取引者(クジラ)に報酬が多く配布されるモデル)に対する <u>一定の不満</u> が生じた。
Story Protocol	2025年2月7日	7	ポジティブであり、初期参加者(テスター)に報酬が付与された。
Wormhole	2024年4月3日		ポジティブではあるものの、資格基準(Discordサーバーにおける特定の役割)を満たさなかったNFTホルダーから <u>一定の不満</u> が生じた。
Kaito	2025年2月20日	5	混合型であり、インサイダー(関係者)に対する過剰な割り当てに関する懸念が生じた。

Magic Eden	2024年12月10日	5	混合型であり、複雑な請求プロセスならびにエアドロップトークンを請求するためにMagic Edenのウォレットアプリケーションが必須であることに <u>懸念が生じた</u> 。
Starknet	2025年2月20日	4	混合型であり、エアドロップファーマーにおける大規模なエアドロップの割り当て獲得を目的とした行為に対し、 <u>一定の批判が集まった</u> 。
Scroll	2024年10月22日	3	エアドロップファーマーの蔓延とインサイダーに対する過剰な割り当てに対し、一定のネガティブなセンチメントと <u>批判が集まった</u> 。
Redstone	2025年3月6日	2	著しくネガティブであり、コミュニティにおけるエアドロップの割り当ての最終段階での変更に対し、 <u>大幅な反発が生じた</u> 。

出典: Binance Research、Grok AI

エアドロップが分散型コミュニティの構築に有用なツールであり続けるためには、暗号資産業界に携わる者が過去のデータから学び、エアドロッププロセスの最適化に向けて継続的に改善を実施する必要があることがわかります。

3.1 過去の失敗から学ぶ

このセクションでは、暗号資産業界にとって有用なケーススタディを中心に解説します。ここでは、取り上げるプロジェクトの批判ではなく、コミュニティの不満が生じた行動の具体例を提供することを目的とします。エアドロップの開催予定があるプロジェクトにとって、こうした過去の失敗から学ぶことは大変意義があると言えます。

最終段階での割り当ての削減

一部の暗号資産プロジェクトでは、初期段階で一定のトークン割り当てをコミュニティに約束した後に割り当てを削減し、トークンをインサイダーまたはトレジャリーに割り当て直しました。最近実施されたRedstoneのエアドロップでは、同チームがトークン割り当て日の直前にコミュニティに対する割り当てを**9.5%から5%**に削減することを決定したため、コミュニティ内で大幅な反発が生じました。同コミュニティの多くのメンバーは、こうした決定を不公平であると受け止めました。

トークンの割り当ての最終段階での変更により、プロジェクトのコミュニティ内で不満が生じる可能性があります。またアイデアや計画の浅はかさを露呈しているケースもあります。これにより、プロジェクトチームはコミュニティからの信頼を失うおそれがあります。

教訓: TGEの十分前にトークンの割り当てを公表することが重要と言えます。また、最終段階での決定済みの割り当ての変更は避けるべきです。やむを得ず変更する必要がある場合、一方的な決定は避けるようにすべきです。代わりに、主要なステークホルダー（投資家、コミュニティ、取引所など）と変更について議論するなど、適切なコミュニケーションを実施する必要があります。

不透明な資格基準と期待値の不一致

過去にエアドロップを実施したプロジェクトでは、エアドロップの明確な資格基準が公開されず、ユーザーアクティビティが反映されていない不公平な報酬の割り当てが横行していました。Scrollが2024年10月に実施したエアドロップでは、SCRTトークンの総供給量(7,000万トークン)の7%を配布したものの、その一方的なスナップショットとルールが非公開であったことに対して批判が集まりました。

2024年10月19日に取得されたスナップショットは、Scrollメインネットでの利用状況(トランザクション量、頻度、dAppの利用など)に基づく報酬付与を目指したものでした。一方、スナップショットの仕組みに関する透明性が欠如しており、コミュニティにおける混乱と不満が生じました。資産のブリッジ、コントラクトのデプロイ、一貫した行動を推奨するガイドラインが存在していたにもかかわらず、エアドロップ実施後の分析では、報酬がこれらの指標に完全に準拠せずに付与され、エコノミーや運営による一方的な意思決定が行われたことが示されています。

エアドロップに関するシビルファームの横行を踏まえると、各プロジェクトは真のユーザーがエアドロップに参加するための十分な情報を提供する一方、大規模なエアドロップの割り当て獲得を回避するために一定の非公開性を保つ必要があります。同業界におけるエアドロップ配布の洗練度が高まるにつれ、モニタリングツールの改善も期待されます。これによりシビルファームが減少し、透明性の高いエアドロップルールが実現することが見込まれます。

教訓: 配布ルールは、参加者に明確に伝えるべきです。期待値のずれにつながる可能性があるため、ユーザー側に過度な推測を要求する状況は避けるべきです(シビルファームに対処するには、オンチェーンモニタリングまたはプルーフ・オブ・ヒューマニティ・ツールの導入をご検討ください)。

インサイダーとインフルエンサーを重視した割当

大抵のプロジェクトでは、エアドロップでのチーム、投資家、VCに対する割り当て量の多さが顕著となっており、コミュニティに対する割り当ては少なくなっています。KAITOが2025年2月に実施したエアドロップでは、その43.3%がチーム / 投資家に割り当てられ、これに関してX上で活発な議論が交わされました。

同様に、各プロジェクトではインフルエンサーに対して多額のトークンを割り当てるケースがあり、インフルエンサーは受領したトークンを即座に売却する傾向があるため、真のユーザーにとってのトークン価値が希薄化する可能性があります。KAITOにおいても、インフルエンサーに対し多額のトークンを割り当て、インフルエンサーはTGEの直後に受領したトークンを売却しました。これにより、トークン価格とコミュニティにおける信頼が損なわれ、議論が白熱しました。

プロダクト開発を軌道に乗せるため、トークンの一部をチームと投資家に割り当てる必要があることに留意すべきであると言えます。トークンは新たな資本形成方法の1つであり、個人投資家はライフサイクルの早期段階で各プロジェクトにステーキングできる一方、ベンチャーキャピタル(VC)も前例のない(早期)段階で流動性が深い市場にアクセスできるようになります。最も革新的である点は、エアドロップの実施によりユーザーは資本投資をせずともプロダクトを利用するだけで各プロジェクトのステーキングに参加できるようになります。

暗号資産市場・業界は共同で、こうした新たな資産クラスとその新たな配布方法に関し、効率性・公正性が最も高い割り当て方法を策定している最中です。また、コミュニティセンチメントと個人投資家・VC投資家の志向性などの要因が、各々の開発段階にある多彩なプロジェクトに対するトークン割り当てを形作ることになります。以上から、継続的な開発への資金提供に充てる十分なトークンの割り当て、並びに各プロジェクトのコミュニティに対する報酬付与のバランスを取ることが重要であると言えます。

インサイダーとインフルエンサーに対する権利確定期間やトークンロックアップの設定は、これらの人々の目標とプロジェクトの長期的な目標を一致させる1つの方法となるほか、TGE直後のトークンの売却がもたらす影響の軽減に役立ちます。

教訓: 常に詳細を確認し、最近および過去の市場の反応を調査し、自身のプロジェクトと類似の性質や規模を持つプロジェクトにおけるトークン割り当ての内訳に関する兆候を確認することが必要です。権利確定期間の設定は、初期の売り圧力軽減のほか、インサイダーの目的とプロジェクトの長期的な目標の一致につながります。

請求プロセスにおける技術的障壁

完全に予防できるわけではないものの、請求プロセスにおける複雑性が高いもしくはバグが多い場合、ユーザーのトークン請求が難航するほか、実質的な受け取り額が減少し、エアドロップ請求過程で当初の目的が大幅に損なわれる可能性があります。

Magic Edenが2024年12月に実施したエアドロップが示す通り、同プロセスにおける技術的障壁により、新規ユーザーのオンボーディングや特定の行動の推進などの目標が直接的に阻害されます。**Magic Eden**では、エアドロップを通じたモバイルウォレットアプリケーションの普及を目指していたものの、**X**との連携の不具合や不明確な指示によりユーザーはフラストレーションを感じ、盛況につながることはありませんでした。

完成度の低いユーザーエクスペリエンスは、エアドロップの請求数の減少につながりプロジェクトが保持するトークン数量が増えることになるだけでなく、初期ユーザーがプロダクトをそれ以上利用しなくなるためポジティブな第一印象を持たれたり利用を推進したりするといった目的との齟齬が生じます。

教訓: エアドロップの請求は、数多くの潜在的なユーザーにとって重要な最初のタッチポイントとなります。同プロセスをスムーズかつ利便性の高いものにするこそが、ユーザーリテンション率の向上につながります。

04 / エアドロップの改善方法

4.1 エアドロップに対する真摯な取り組みと透明性の向上

暗号資産業界において、透明性はその中核をなす要素の1つであると同時に、強固かつ忠実なコミュニティを構築するためにチームが準備できる手段であるとも言えます。

暗号資産分野は通常、コミュニティ主導・コミュニティ依存の分野となっています。暗号資産プロジェクトおよび創設者は、強固かつ利便性の高いプロダクトを開発することに加え、適切に先導され、さらに目的主導型のコミュニティを確立する必要があります。これは、プロジェクトの初期段階（特にプロジェクトの創設直後かまもなく創設する段階）においては特に重要となります。

適切に実施されれば、エアドロップやトークンインセンティブはプロジェクトのプロダクトやエコシステムにメリットをもたらす行動を推進させます。各プロジェクトにおいては、エアドロップまたはトークンインセンティブプログラムに真摯に取り組み、こうした姿勢をコミュニティに明確に伝えることで、両者における目標の不一致や誤解を最小限に抑えることが推奨されます。

エアドロップは通常、プロジェクトの顧客基盤における特定の行動に対し報酬を付与（「遡及的エアドロップ」）、または奨励（「エンゲージメントエアドロップ」）するものです。これらの行動は、プロジェクトチームがプロジェクトの健全性にとって最も有益であるとみなすものと一致する必要があります。プロジェクトチームは、その取り組み内容を明確に伝達することで、コミュニティの目標と同チームの目標・ビジョンを一致させることができ、各行動に基づくエアドロップの割り当ての差に対する不満を減らすことができます。

遡及的エアドロップ	エンゲージメントエアドロップ
<p>エアドロップの請求開始前に、割り当て基準が顧客基盤に明確に伝えるようにする。</p> <p>コミュニティと常にコミュニケーションを取り、その大多数がとる行動がプロジェクトの健全性を保つのに有益なものとなるようにする。</p> <p>これにより、期待値のずれから生じるネガティブなセンチメントが減少する。</p>	<p>エアドロップの割り当て基準（ポイントとトークンの比率、ウォレットアクティビティのしきい値、タスクへの重み付けなど）をコミュニティに対して可能な限り明確に伝達し、周知公開後は基準を変更しない。</p> <p>これにより、期待値が打ち立てられるほか、プロトコルに有益な行動に関する明確な情報が早期段階でコミュニティに提供される。</p>

4.2 コミュニティの参加推進

ソフトウェアやプロダクトは早いスピードで構築され得るものの、コミュニティの構築には時間を要するケースが多くなっています。プロジェクトトークンは、ソフトウェアプロダクトとそのコミュニティの両側面を包摂することが往々にしてあります。暗号資産業界では、迅速に行動し結果を出すチームが当然のごとく評価されるものの、プロジェクトのコミュニティと結び付いた側面（トークンが大部分を占める）により時間をかけることが推奨されます。

プロジェクトチームにおけるプロジェクトの目標とミッションに関する透明性の確保により、同チームとコミュニティの間での目標は寄り添いあったものとなるとは言え、それはあくまで限定的なものとなります。特に、プロジェクトが複雑性の高い目標とミッションを掲げている場合、プロジェクトが成長していくには、コミュニティを巻き込んで直接的なフィードバックを受け取るためにさらなる取り組みが必要になると言えます。

暗号資産分野は驚異的にオープンかつ障壁のない業界であり、その在り方は積極的に維持していくべきものです。一方、参入障壁の低さに応じて、撤退障壁も低くなります。オープンブロックチェーンプロトコルにより、ユーザーはこれまでよりも容易に資金を任意の場所に移動することが可能となりました。ユーザーは長期的には、チームのビジョンを明確かつ透明性高く伝達するだけでなくコミュニティの意見を大切にするプロジェクトに系統することが見込まれます。

すべてのエアドロップに必要なこと

エアドロップの割り当てと重み付けに関する意思決定プロセスに、プロジェクトのコミュニティを関与させる必要があります。これにより、(1) 意思決定プロセスでユーザーに対し発言権を付与、および (2) プロジェクトチームへのユーザーの志向性に関するフィードバックを直接的に提供できるようになり、割り当ての齟齬の軽減につながります。

4.3 モニタリングの改善

暗号資産業界における成熟度の高まりに伴い、実行とモニタリングのための高性能なオンチェーンツールの開発が進んでいます。**LayerZero**やNansen(オンチェーン分析企業)と提携するプロジェクトでは、エアドロップを狙うシビルファーマーを特定・資格剥奪できます。

未だ十分な普及段階には至っていないものの、ユーザーの匿名性とプライバシーの保護を実現するプルーフ・オブ・ヒューマニティ・ツールは、将来的にエアドロップを巡る「ゲーム(投機的行為)」の回避に役立つ可能性があります。

業界でモニタリングツールが継続的に改善および普及するにつれ、各プロジェクトでの望まれないエアドロップファーマー行為の特定・資格剥奪が容易になることが見込まれます。このため、長期的にはこうした行為が最小限に抑えられる可能性があると言えます。

すべてのエアドロップに必要なこと

特に、大規模かつ額の大きいエアドロップでは、オンチェーンモニタリングやプルーフ・オブ・ヒューマニティツールの利用、ならびにシビルファーマー行為の特定・トークン受領資格の剥奪を行うことで、プロジェクトとコミュニティが享受できるメリットが大きくなります。この点に関し各プロジェクトのリーダーシップが強力であるほど、公平性確保に関するその取り組みを示すものであるとともに、望まれないファーマー行為の削減につながります。

05 / まとめ

暗号資産トークンは新しい形式の資産であり、トークンのエアドロップはさらに先進的な配布形式の1つとなっています。プロジェクトがトークンのローンチを決定すると、同トークン(資産)は通常、シェリングポイント(コミュニケーション手段がない場合に、人々が採るであろう自然で特別で適切と思われる解決策)となり、同トークンを巡ってコミュニティ全体が結集します。エアドロッププロセスは、コミュニティがそのトークンと初めてやり取りをする機会であり、ここで今後数か月間～数年間の動向が決まると言えます。

今後の見通しとしては、引き続きこの新しい形式の資産とその革新的な分配方法の価値と割り当て方法を集合的に決定するのは市場であり、非効率性の継続が見込まれます。一方、業界全体としては、プロジェクトもユーザーも現時点でのエアドロップ方法に対する一挙手一投足が将来的なエアドロップやその他のトークン配布方法を形作ることに関心を寄せ、これを強く認識する必要があります。

06 / 参考資料

1. <https://www.bitget.com/news/detail/12560604235522>
2. <https://beosin.com/zh/resources/a-closer-look-at-the-anti-sybil-mechanism-under-the-arbitrum>
3. <https://members.delphidigital.io/reports/do-airdrops-hurt-more-than-they-help>

07 / 最新のBinance Researchレポート

ビットコインの未来(第4弾): [DeFi](#) - [リンク](#)
DeFiにおけるビットコインの新たな役割に関する詳細情報を提供。



月次市場洞察 - 2025年3月 - [リンク](#)
重要度の高い市場動向、注目すべきチャートの動き、今後のイベントをまとめました。



Binance Researchについて

Binance Researchは、世界有数の暗号資産取引所であるバイナンスの調査部門です。暗号資産に関する客観的かつ独立した包括的分析の提供に努めているほか、暗号資産分野におけるソートリーダーを目指しています。アナリストは、暗号資産エコシステム、ブロックチェーン技術、市場の最新テーマなどのトピックに関する洞察に満ちた見解を定期的に公開しています。



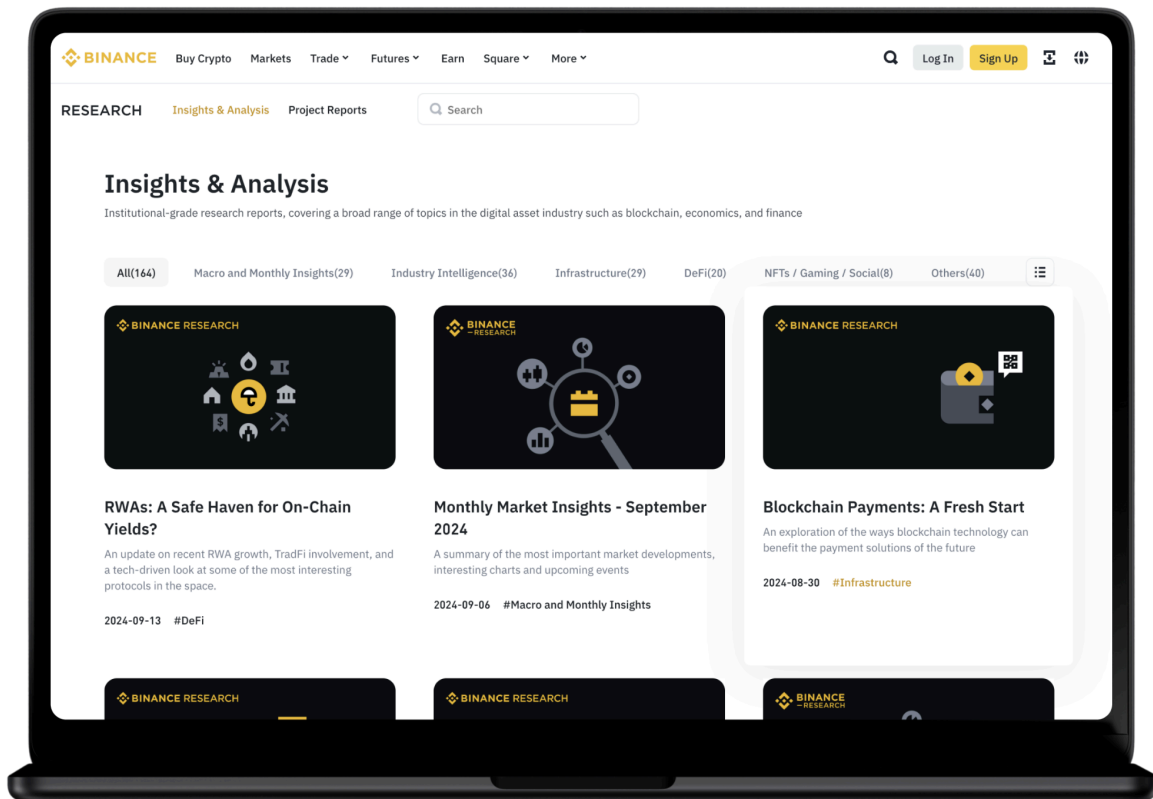
Joshua Wong

マクロリサーチアナリスト

Joshua Wong (ジョシュア・ウォン)は、バイナンスでマクロリサーチアナリストを務めています。暗号資産分野には、2017年から携わっています。バイナンスへの入社前、WongはWeb3のフィンテックスタートアップ企業のプロダクトマネージャーとして勤務していたほか、DeFiスタートアップ企業の市場アナリストとしても活躍していました。ダラム大学で法学士(LLB)を取得しています。

リソース

Binance Research - [リンク](#)



フィードバックは[こちら](#)からどうぞ

一般的な情報開示: この資料はBinance Researchが作成したものであり、予測や投資助言目的で利用されることを意図したものではなく、また有価証券や暗号資産の売買および投資戦略の採用を推奨、提案、勧誘するものでもありません。用語の使い方および見解は、この産業分野の理解と責任ある発展を促進するためのものであり、法定的見解またはバイナンスの見解として解釈されるべきものではありません。表明された意見は、上記の日付時点での執筆者の見解となります。その後の状況の変化により、内容は変動する可能性があります。本資料に含まれる情報および意見は、Binance Researchが信頼できると判断した独占的および非独占的情報源から得られたものであり、必ずしもあらゆる情報を網羅するものではなく、正確性を保証するものではありません。そのため、バイナンスは正確性や信頼性を保証するものではなく、誤りや省略に関しあらゆる形で発生する責任（過失によるあらゆる人物に対する責任を含む）も負いません。この資料には、純粋な歴史的事実ではない「将来の見通し」情報が含まれている可能性があります。このような情報には、予測や予想などが含まれることがあります。いかなる予測も、その実現を保証するものではありません。本資料に記載された情報を信頼するか否かは、読者の単独の判断に委ねられます。この資料は情報提供のみを目的としたものであり、一切の証券、暗号資産または一切の投資戦略の購入または売却についての投資助言、提案または勧誘を構成するものではなく、また、読者の当該法域の法律により提案、勧誘、購入または販売が違法とされる相手に対しいかなる有価証券または暗号資産をも提供または販売するものでもありません。投資には、リスクが伴います。詳細は、[こちら](#)をクリックしてご覧ください。